

関係からカテゴリーへ 系譜から社会へ

—北部マダガスカル ツィミヘティ族の関係名称考—

深 澤 秀 夫

I 問題の所在

今を去る20年近く前、イギリスの社会人類学者M. ブロックは、マダガスカルの各民族の関係名称⁽¹⁾を概括し、次のように指摘した。

多少の違いはあるにせよ、親族名称は（マダガスカルの）島全体を通じて均一であるのに対し、これらの名称を用いているそれぞれの社会組織や親族体系は変化に富んでいる。マダガスカルの様々な民族は、ある地域では灌漑稲作に基く生業を営み、他の地域では焼畑移動耕作民である。あるいは、牧畜民や採取狩猟民も存在する。また、ある地域では単系出自集団の組織が見られ、他の地域では内婚志向の強い序列化された親族集団というカースト様の構造が見られる。しかしながら、このような親族の組織化に於ける著しい多様性にもかかわらず、この島のあらゆる民族は、同じ言葉をしゃべり、事実上同一の親族名称体系を採っている。このことは、名称と社会組織との間のあらゆる結び付きをはっきりと否定している（M. Bloch, 1971b : p. 79）。

さらに、ブロックが調査を行なったメリナ族の親族名称は、「ハワイ型に属している。そのためごく少数の名称と類別が、（関係上）はるか遠くにまで拡張され用いられている。このことは、どのように遠い関係であれ、全ての親族が、近親に対して使用される名称によって呼称されることの可能性を意味している」（M. Bloch, 1971a : p. 83）。したがって従来社会人類学が採ってきた、関係名称の体系性の分析や関係名称の類別化と社会的行動—規範との係わりの分析はマダガスカルにあっては無効であり、親族用語をも含むある単語は、1) 価値体系の中でそれらの単語が占める位置、2) それらの単語が与えることのできる操作的用法（tactical uses）の視点から考究されるべきである（M. Bloch, 1971b : pp. 79-80）。

これに対して北西部のサカラヴァ系王国の研究を行ってきたフランスの民族学者 J.-F. パレは、同じくマダガスカルの関係名称についての論文の中で次のように書き記している。

調査を行なった（親族）語彙は、ヌシ・ファーリからアンブル岬までの北部沿岸のアンタンカラナ族、北東部沿岸のベツィミサラカ族、北部中央高地のシハナカ族とツィミヘティ族によって、同じかたちで日常的に用いられている。通常は完全に独立した文化的単位と考えられ、

そのため別個の「民族」とも見られてきたこれらの集団も、基本的な論理規則を共通に有しまた使っているものと思われる。この論文の目的は、規範の見取図 (le plan normatif) を示すことにある。したがって、サカラヴァの文化が(規範の)違反や逸脱にどのような意味を付与しようとも、実行について言語の裏づけを何ら必要としない社会的行為の領域の問題については、ここで考察を加えるものではない。この言語領域の規則の否定を論じないということは、「意味がない」「翻訳できない」あるいは個人は皆に認められた規則に背くやり方をもつとの言葉によりサカラヴァ族の人びと自身によっても、はっきりと表わされている (J.-F. Baré, 1974: pp. 7-8)。

関係名称と社会組織や行為との間に直接的な対応関係を認めないという点では前述のブロックもこのバレも同じ立場にあるが、バレは少なくともマダガスカル北部に広がる関係名称はそれ自体としてひとつの体系を成し、この体系を言語的に分析することによって規範を抽出することが可能であるとする点に於いてブロックとは隔っている。

民族誌等を基にマダガスカルの各民族の関係名称を調べてみると、⁽²⁾ 確にイトコ名称についてはブロックが指摘するようにハワイ型という点で共通するものの、+1世代と-1世代の名称については、双岐性 (bifurcation) をめぐって、明らかな民族もしくは地方毎の差異が認められる。すなわち+1世代に於いては、双岐性が見出されないのはメリナ族だけであり、他の民族にあっては、1) {F=FB} ≡ MB かつ {M=MZ} ≡ FZ 2) {F=FB} ≡ MB 3) F ≡ FB ≡ MB かつ M ≡ MZ ≡ FZ いずれかの形式の双岐性が存在する。また-1世代については、ツィミヘティ族、ベツィミサラカ族、サカラヴァ族の三者に於いて、{S=BS} ≡ ZS かつ {D=BD} ≡ ZD、さらにまとめれば {C=BC} ≡ ZC (ただし話者が男性の場合) の双岐性が指摘され、この双岐性の分布域はバレが言う北部地方の同質的關係名称の一带とほぼ重なりあっている。ハワイ型という関係名称パターンの一般的特性は、世代と性による区分および双岐性や傍系性 (coraterality) などの区分の欠如であり、とすれば先のブロックの言は拙速にすぎたマダガスカルの関係名称についての一般化と言えよう。⁽³⁾

本論は、+1世代と-1世代の双方に双岐性を持つツィミヘティ族の關係名称について、筆者自身の調査資料を提示すると共に、⁽⁴⁾ 後述するバレによる北部サカラヴァ族の關係名称の規範分析に基く長周期型交換婚の存在またはその可能性の指摘 (J.-F. Baré, 1974: pp. 32-37) との係わりに於いて、この双岐性が何を表現しているのかを考察することを目的とする。

II 關係名称 資料

以下にツィミヘティ族の關係名称とその指示範囲を示す。⁽⁵⁾

- | | | |
|-------------|--|--------------------|
| 1. dadilahy | | FF, MF + 2世代の全男性親族 |
| 2. dadivavy | | MM, FM + 2世代の全女性親族 |

3. ray	F, MH
4. baba	F, MH
5. iada	F, MH
6. iada-be	FB, MZH (父より年長の場合), + 1 世代の父より年長の全父方男性親族, + 1 世代の全母方女性親族の配偶者のうち父より年長の男性
7. iada-hely	FB, MZH (父より年少の場合), + 1 世代の父より年少の全父方男性親族, + 1 世代の全母方女性親族の配偶者のうち父より年少の男性
8. reny	M, FW
9. niny	M, FW
10. nini-be	MZ, FBW (母より年長の場合), + 1 世代の母より年長の全母方女性親族, + 1 世代の全父方男性親族の配偶者のうち母より年長の女性
11. nini-hely	MZ, FBW (母より年少の場合), + 1 世代の母より年少の全母方女性親族, + 1 世代の全父方男性親族の配偶者のうち母より年少の女性
12. angovavy	FZ, + 1 世代の全父方女性親族
13. zama	MB, FZH, + 1 世代の全母方男性親族, + 1 世代の全父方女性親族の配偶者
14. zena	MBW, + 1 世代の全母方男性親族の配偶者
15. rafozana	HF, HM, WF, WM
16. soja-lahy	HF, WF
17. soja-vavy	HM, WM
18. { rahalahy { anadahy	(male speaking) B, 同世代の全男性親族 (female speaking)
19. { anabavy { rahavavy	(male speaking) Z, 同世代の全女性親族 (female speaking)
20. zoky	同世代の全年長親族一姻族
21. zandry	同世代の全年少親族一姻族
22. vady	H, W
23. namaña	H, W
24. valilahy	WB (male speaking), HB (female speaking), ZH, 同世代の全女性親族の配偶者
25. rañaao	WZ (male speaking), HZ (female speaking), BW, 同世代の全男性親族の配偶者
26. roky lahy	HZH, WZH

27. roky vavy	HBW, WBW
28. zanaka	{ (male speaking) S, D, BS, BD, 同世代の全男性親族の子供 (female speaking) S, D, ZS, ZD, 同世代の全女性親族の子供
29. asidy	{ (male speaking) ZS, ZD, 同世代の全女性親族の子供 (female speaking) BS, BD, 同世代の全男性親族の子供
30. vinanto	SW, DH, - 1世代の全親族の配偶者
31. rangahy	DH, - 1世代の全女性親族の配偶者
32. zafy	SS, SD, DD, DS, - 2世代の全親族
33. zafiafy	- 3世代の全親族
34. zafin-dohalika	- 4世代の全親族
35. zafin-kôtrokely	- 5世代の全親族
36. zafimpaladia	- 6世代の全親族

1の dadilahy と 2の dadivavy は、+ 2世代の親族を指示する dady に、「雄」を指示する lahy および「雌」を指示する vavy が付加した単語である。⁽⁶⁾しかし、ツィミヘティ族出身のファリダヌナはそのツィミヘティ方言辞典の中で、dady を「祖母」、dadilahy を「祖父」と説明し、dadivavy の語を掲げていない (Faridanonana, 1977: 21)。調査村に於いても日常会話の文脈では、同様の用法を認めうるが、dady をあらためて dadivavy と言いなおすこともあり、dady が+ 2世代の全親族を指示する単語として有意である。

3の ray と 8の reny は日常的に使用されることが少なく、1820年代のイメリナ王国軍の進入以降生じたメリナ族との接触や交流を通じて、メリナ方言から入ってきた単語と推測される。

4の baba と 5の iada は、必ずしも相互排他的ではないが、一般に、baba は呼称、iada は名称として使用される。baba はまた、子供の名前+baba というテクノニミーの形で、夫婦間を含む対人名称および呼称としても汎用されている。9の niny は呼称と名称の区分がないが、同様なテクノニミー用法は存在する。

6の iada-be と 7の iada-hely, 10の nini-be と 11の nini-hely に於ける be は「大きい」、hely は「小さい」を表わす形容詞である。父または母を基準とする年齢上の長幼によって -be と -hely を付加し、結果的に直系親族と傍系親族とを区分しているが、iada と niny が基本名称である。だからと言って、「父はオジであるか」「オバは母であるか」との質問は意味を成さないが、社会的に規定された態度の関係に於いては、iada と iada-be. iada-hely, niny と nini-be. nini-hely とはひとまとめに扱われる。

12の angovavy は、先のファリダヌナによれば、angy「父」+vavy「女性」、すなわち「女性の父」の意であり、angy の語はツィミヘティ族では既に用いられなくなっているが、東部地方でその使用が認められると説明されている (Faridanonana, 1977: 12)。しかしながら、ここで

は angovavy をもって基本関係名称と定める。

16の soja-lahy と17の soja-vavy は、上述の -lahy と -vavy が付加されてその性別が指示されているものの、soja が基本名称である。しかし、soja の語は、元来は「家長」や「族長」、「分別のある年長男性」を意味している (cf. Faridanonana, 1977: 102)。

18の rahalahy と anadahy, 19の anabavy と rahavavy の内、anadahy と anavavy はそれぞれ anaka「子供」+lahy「男性の」=「男の子」および anaka「子供」+vavy「女性の」=「女の子」という複合単語であることは確定している (cf. B. F. F. Z. M, 1937-1970) 一方、rahalahy と rahavavy の中の raha- の意味については明らかではない (cf. R. J. Richardson, 1967: pp. 487-488, R. P. Abinal et S. J. Malzac, 1955: p. 499)。anaka は28の zanaka と同語であるが、⁽⁷⁾ anaka が娘や息子などに対する名称・呼称として用いられることはなく、anaka は常に anadahy と anabavy, または mianaka や fianakaviana という形に於いて親一子関係をめぐる集団性を表現する用法としてのみ見出される (cf. 深澤, 1987)。話者の性別に基く区分を含め、rahalahy と anadahy, anabavy と rahavavy を基本名称として扱うことにする。

20の zoky と21の zandry は、親族関係の存在しない人と人との間に於いても、両者の年齢差を基に、名称と呼称の双方の面で汎用され、親族一姻族の関係名称としての性格は薄い。

22の vady と23の namaña との違いは、vady が夫や妻を指す「配偶者」の意味であるのに対し、namaña は夫や妻に留まらず「仲間」の意味として社会的に多様な関係の間にも適用される点にある。両者とも通常は呼称として使用されることはない。また、複婚に於ける妻達を vady masay と総称し、第一夫人を vadi-be「大きな妻」、第二夫人以下を vadi-hely「小さな妻」、複婚に於ける妻達同士の関係を rafy と呼ぶ。rafy はまた、一人の男性を巡る女性達、一人の女性を巡る男性達という「恋敵」の意味としても日常使用されている。

24の valilahy は、valy+lahy の複合語であり、valy は vady の方言形態であるとされている (R. J. Richardson, 1967: p. 730)。しかしながら、ツィミヘティ族同様 valilahy の関係名称をもつ北部サカラヴァ族 (cf. D. Thomas-Fattier, 1982)、南部タナラ族 (cf. P. Beaujard, 1983) の社会に於いて配偶者は vady であり、一方配偶者を valy とするマシクル族に於いて WB と ZH は velahy と名称されている (H. Lavondés, 1976: pp. 46-56)。マダガスカル語に於いて -ka, -tra, -na で終わる単語と L- で始まる単語とを複合した場合、後者の L- は d- に音便変化を生じる havana「親族」+lavitra「遠い」→havan-davitra (R. Rajemisa-Raolison, 1969: pp. 9-11)。ところが、vady は二音節の上 -ka, -tra, -na では終わらない単語であり、上記の音便変化の規則は成り立たない。仮に音便法則が適用されるとしても、vady+lahy→vadin-dahy となるべきところである。さらに先のタナラ族に於いては、話者を女性とした時、valilahy は HZ と BW の女性を指示し、-lahy が「雄の」あるいは「男性の」という原義であることとも矛盾している。vady と valy を等号で結ぶことのできる蓋然性が高いとは言え、valilahy を

vady+lahy に分解し vady を基本関係名称とするよりは、valilahy を vady とは別に基本名称と置くことをここでは選択する。

26の roky lahy と27の roky vavy は明らかに roky が、配偶者のキョーダイの配偶者を指示する基本名称である。roky とは R. J. リチャードソンによれば「あなた、君、おまえにあたる方言名称」(R. J. Richardson, 1967: p. 525) と説明されているものの、ツィミヘティ族ではこの二人称の意味で roky を用いることは、少くとも現在はない。

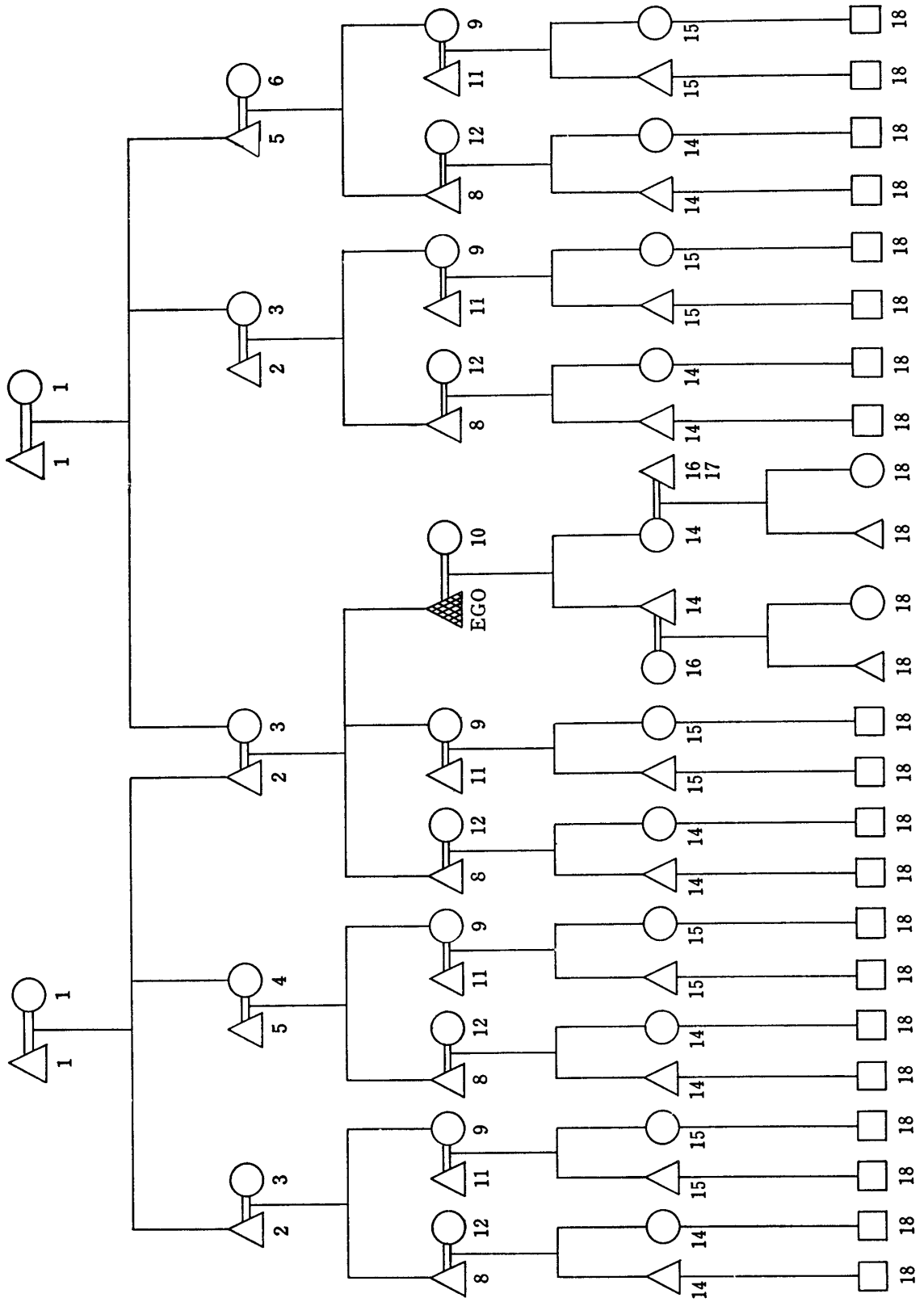
31の rangahy は、メリナ方言では、「老人、呼称の尊敬態」(R. J. Richardson, 1967: p. 496) もしくは「旦那」を意味するが、ツィミヘティ方言では vinanto-lahy すなわち娘の配偶者を含む-1世代の全女性親族の配偶者に対する尊敬態としての名称および呼称として用いられる。

33の zafiafy の afy とは、孫などの-2世代の親族を示す名称とされている (R. J. Richardson, 1967: p. 7, p. 793) が、ツィミヘティ方言では afy の単独使用は認められず、この zafiafy の形でのみ用いられている。34の zafin-dohalika は zafy と lohalika の複合語で、lohalika はひざの意、35の zafin-kôtrokely は zafy と kôtrokely の複合語で、kôtrokely はメリナ方言の kitrokely に相当しくるぶしの意、35の zafimpaladia は zafy と faladia の複合語で、faladia は足の裏の意である。したがって、-2世代以下の基本関係名称は、zafy の一語であると考えることができる。

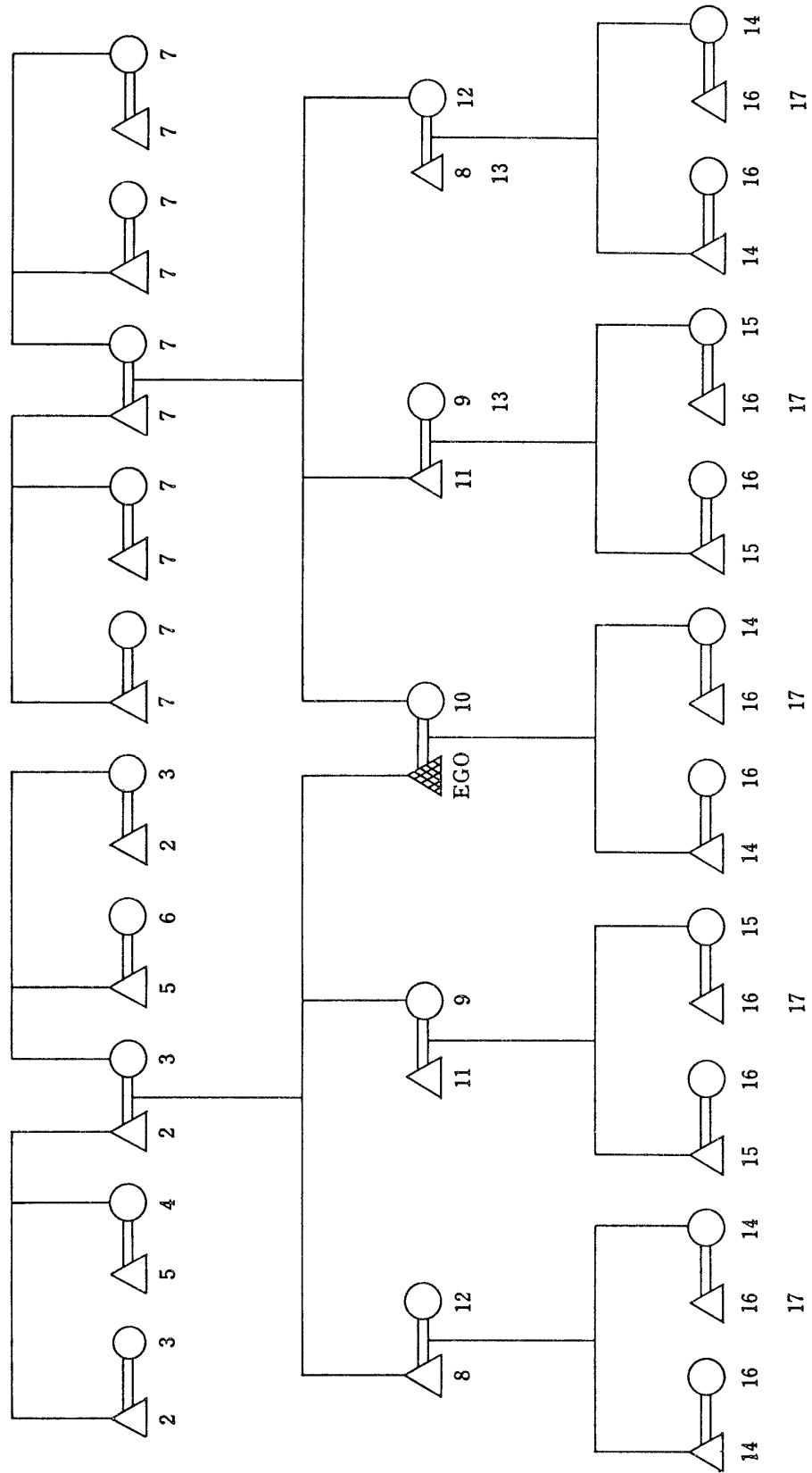
以上より、呼称および複合語などを除いたツィミヘティ族の基本関係名称は、以下の通りである。

1. dady	+ 2 世代以上の全親族	
2. iada	+ 1 世代の全父方男性親族, + 1 世代の全母方女性親族の配偶者	
3. niny	+ 1 世代の全母方女性親族, + 1 世代の全父方男性親族の配偶者	
4. angovavy	+ 1 世代の全父方女性親族	
5. zama	+ 1 世代の全母方男性親族, + 1 世代の全父方女性親族の配偶者	
6. zena	+ 1 世代の全母方男性親族の配偶者	
7. rafozana, soja	配偶者の両親とその+ 1 世代の親族と配偶者	
8. { rahalahy { anadahy	{ (male speaking) { (female speaking) } 同世代の全男性親族	WZH HZH
9. { anabavy { rahavavy	{ (male speaking) { (female speaking) } 同世代の全女性親族	WBW HBW
10. vady, namaña	配偶者	
11. valilahy	WB (male speaking), HB (female speaking), ZH, 同世代の全女性親族の配偶者	
12. rañao	WZ (male speaking), HZ (female speaking), BW, 同世代の全男性	

関係名称の図表 1



関係名称の図表 2



	親族の配偶者
13. roky	配偶者の兄弟姉妹の配偶者
14. zanaka	(male speaking) 同世代の全男性親族の子供, 妻の同世代の女性親族の子供
	(female speaking) 同世代の全女性親族の子供, 夫の同世代の男性親族の子供
15. asidy	(male speaking) 同世代の全女性親族の子供, 妻の同世代の男性親族の子供
	(female speaking) 同世代の全男性親族の子供, 夫の同世代の女性親族の子供
16. vinanto	- 1世代の全親族・姻族の配偶者
17. rangahy	- 1世代の全女性親族の配偶者
18. zafy	- 2世代以下の全親族

III 特 性

1 世代区分

基本関係名称の中で、二世代以上の関係について指示する単語は、+2世代以上の dady と -2世代以下の zafy の二つである。

dady という語は、具体的な人と人との関係の指示という点では、祖父・祖母の意、すなわち +2世代上の直系・傍系の男性および女性を対象に日常生活の中で用いられている。その一方、〈土地の主〉(tompon'tany) の長老男性が供饗 (jôro) を行なうに際しての唱え言の中では、「××の墓に居ます dadilahy と dadivavy」との呼びかけが必ず織り込まれている。この後で、墓に埋葬されている様々な世代にわたる主だった男性と女性の個人名が、挙げられる。このような用法としての dady は、「+2世代以上の全親族に対する関係名称」というよりも、ツィミヘティ族の「祖先」(razana) という単語の呼称として存在するもの⁽⁸⁾と考えることができる。すなわち、「祖先よ」(ry razana eh!) との表現が文法上可能であるにもかかわらず実際にそれが用いられずにそのような社会的脈絡で dady が使われているということは、関係名称としての dady の指示範囲は+2世代に限定され、+3世代以上の指示範囲は社会的カテゴリーとしての dady に付随するものである。

zafy という単語も、zafiafy, zafin-dohalika, zafin-kôtrokely, zafimpaladia の複合型によって-2世代から-6世代までを指示範囲とする関係名称と一応捉えられる一方、自己を基点とする限り現実には存在そのものの可能性が極めて低い-6世代に至る世代深度の深い人びとに対する名称の使用に疑問が生じる。ツィミヘティ族の人間が実際にこれらの名称を用いる場面は、

「遠縁」(havana lavitra) と思しき二人の人間が出会った時、二人の共通の祖先を基点に互いの位置する関係を確認するときである。例えば、二人の男性がある共通の祖先の zafin-kôtrokely であるならば、二人の間柄は、「キューダイ関係」(ampiralahy⁽¹⁰⁾) である。一人の男性がある祖先の zafin-dohalika であり、ある女性はその祖先の zafiafy であるならば、二人の間柄は、「オバ—オイ関係」(ampisidy, misidy) であり、さらにその女性が父方親族 (fokondray) であるならば、女性は男性の「父方オバ」(angovavy) に分類される。ツィミヘティ族の系譜認識は、直系の祖先についてさえほぼ3世代を上限とする浅いものである一方、村の開祖 (lohan'omby) などの特定の祖先を基点として、自分が何世代めに位置するのかわを zafy プラスの単語によって記憶しそこから互いの関係を算定する方法を用いている。したがって自己を基点とする関係名称としての zafy は、-2世代の親族を指示するものである。

このように二世代以上にわたる指示範囲をもつ dady と zafy も、自己を基点とする関係名称としては一世代に限定され、zafiafy 以下の単語の用法にも示されるように、世代区分はツィミヘティ族関係名称全体に見られる特性である。

2 性 別

18の基本関係名称のうち性別による区分が存在しないのは、1の dady, 7の rafozana と soja, 10の vady と namaña, 13の roky, 14の zanaka, 15の asidy, 16の vinanto, 18の zafy の8名称である。このうち -lahy と -vavy の語を付加することによって性別の区分を行ないえるのは、dady, rafozana, soja, roky, zanaka, asidy, vinanto であるが、日常会話の中で性別を明示して使用されることが少ないのは rafozana, zanaka, asidy である。したがって性別の区分は、+1世代と0世代の親族および0世代の姻族に対する名称に於いて顕著である。

また、8の rahalahy と anadahy, 9の anabavy と rahavavy, 14の zanaka, 15の asidy には、自己と対象との関係だけではなく、話者自身の性別が、名称の選択もしくは対象の指示の決定に関与しているという特性が認められる。同世代のキューダイ名称に於ける話者の性別の基準は知りうるマダガスカル全ての民族の間で見出されるのに対し、-1世代に於ける話者の性別による同一関係名称の指示対象の変化は、このツィミヘティ族、ベツィミサラカ族、サカラバ族の三民族もしくは先のバレが指摘する北部地方にのみ見出される。さらに、前者が話者の性別の基準の問題であるのに対し、後者は正確には自己と指示対象者の親の性別の異同、すなわち対象の人がどちらの性の連結親族を通して自己と結ばれているのかという双岐性 (bifurcation) の基準の問題 (cf. G. P. Murdock, 1949: 104) であり、先述したようにこの双岐性は+1世代の名称にも存在している。

3 傍 系 性 collaterality

ツィミヘティ族の関係名称には双岐性が存在する一方、基本関係名称の範囲内では、F=FB, M=MZ, B=FBS=FZS=MBS=MZS, Z=FBD=FZD=MBD=MZD, S=D=BC=FBSC=FZC=MBSC=MZSC と傍系の基準が見られないことが特性である。ただ、名称の実際的運用面では+1世代に限り、自己の親と対象の人間との年齢差に基づき、-be「長」、-hely「幼」を付加することによってFとFB他、MとMZ他とを区分し、傍系性に対する考慮が払われている。

4 年 齢

年齢の基準は、関係名称の範囲内では上述のように+1世代に於ける直系／傍系の区分を行なう上で作用しているにすぎないが、呼称上では「年齢差が世代差に優位する」との形で大きな位置を占めている。すなわち、系譜的世代の上で自己よりも上位に位置する人間が実年齢に於いて自己とほぼ同年齢かそれよりも年少の場合、自己を基点に置くと対象の繰り下げが行なわれるのである。良く見られる事例では、母方オバ(nini-hely)にあたる母の妹達がいた場合、自己と実年齢に於いて隔たりがある時はnini-helyの呼称が用いられる一方、実年齢に於いて2～3才ぐら⁽¹¹⁾いの隔りしかないか年少の時は、本人の実名が用いられる。本人の実名を呼び合うことのできる間柄とは同世代内の、殊に「キョーダイ関係」(ampianadahy)にあたる人間同士であり、系譜的な世代だけを考えた場合、自己より上位世代に属する人間に対し実名で呼びかけることは一般に、'tsy mahalala fomba'「習慣を知らない」すなわち「失礼」であるとされている。

しかし、村落内に於ける人びとの年齢の認識は、自己を基点とする「年長」(zoky)と「年少」(zandry)の区分およびごくゆるい年齢階梯区分⁽¹²⁾への位置づけをもってなされ、村落内に居住する成人男性75人ほどの間でさえ誰は誰よりも年長か年少かとの年齢上の序列化についての了解は徹底していない。婚入女性(vaiavy nalaiñy)の実年齢となるとその夫でさえ自分より年長であるか年少であるかの一点を除いてほとんど無関心であるが、相対年齢を認識していれば、日常生活の場面で困ることはない。

5 呼 称

関係呼称の実際的運用と系譜上の位置関係・関係名称上の分類・相互の年齢差などとの相関は複雑であり、その運用の原理ないし体系を把握しえていないが、村内の成人男子間の呼称に限定して中間的な見通しを述べれば、a. 両者の系譜的位置関係よりも、註(12)に示したごくゆるい年齢階梯の区分が、呼称の選択の決定に重要な基準を与えている b. 関係名称上の分類とは別に、呼称対象と自己との年齢差を基に、「親しい間柄」を表現する呼称が選択される の二点を挙げられよう。註(11)で詳述したテクノニミーを除く村内で用いられる成人男子間の呼称はほぼ、iaba, mama, zoky, dodo の四つの単語に集約することができる。

iaba : iaba は東に隣接するベツィミサラカ族では父を指示する関係名称であるが (I. Rakoto, 1971 : pp. 126-129), ツィミヘティ族の間では, 自己より年長の男性に対する呼称として汎用され, 対象の男性が関係名称の上で iada すなわち「父」に分類されるか否かとは無関係である。また子供をもたない青年達の間でも使用され, 社会的カテゴリーとしての「父」とも必ずしも結び付いてはいない。

mama : 本来は母方オジとオイの間で相互に用いられる呼称であるが, 系譜関係を離れ年齢が比較的近接する男性間の一般的呼称として日常的に用いられる。

zoky : 「お兄さん」の語感を持つ単語で, 同世代の自己よりも年長の親族に対する関係名称であると同時に, 年長の人間に対する呼称として汎用されている。

dodo : 本来はキョーダイ間に於ける相互呼称であるが, 年齢が近接する人間間の呼称として日常的に使用される。ただし, 前述の三つの呼称と比較すると, 幼児語的な響きがある。

以上, 村落内の成人男子間の呼称は, a. iaba のチチームスコ関係系, b. mama の母方オジーオイ関係系, c. zoky と dodo のキョーダイ関係系 の三者に分類される。a が尊敬 (manaja) の関係にあるとすれば, b と c, ことに b は最も親しみを抱きあるいは期待できると共に気軽に付き合える男性と男性との関係を表現しているものとツィミヘティ族の人びとによって捉えられている。もちろんその関係に込められているのは感情や態度ばかりではなく, 割礼に於いて切除された子供の包皮を食べるべきはその子供の母方オジであり, 稲作の協同労働組織 (asa raiky) を形成する中核は同母のキョーダイである (cf. 深澤, 1989) といった, 儀礼的もしくは社会的関係もまたそこに重ね合わされている。ではなぜこのように社会的に重要な親族関係を指示する呼称やそのような関係の間柄で使用されるべき呼称が, 系譜関係や関係名称上の分類を離れ村落内の男性の間でほぼ年齢差だけを基準に日常的に使用されるのであろうか。

断定はできないものの, 現在の段階ではこの問いを次のように考えることができる。すなわち, 親族関係を持たない他所者 (vahiny) をも必然的に含めて成立しているムラ (fokon'olona) 内の日常生活と付き合いの中で, 実際の系譜関係から関係名称の体系に分類して呼称し, 人と人との間の差異を強調することよりも, どのような系譜関係もしくはその欠如とも無関係に年齢差のみに依拠して親しかるべき男性間の呼称や尊敬の呼称を一律に適用することが, 親族関係 (fiha-vanana) とは異なる社会関係 (fiaraha-monina) の位相に於いて成立しているムラの成員の対等性⁽¹³⁾と平等性の理念に沿うものなのである (cf. 深澤, 1987)。

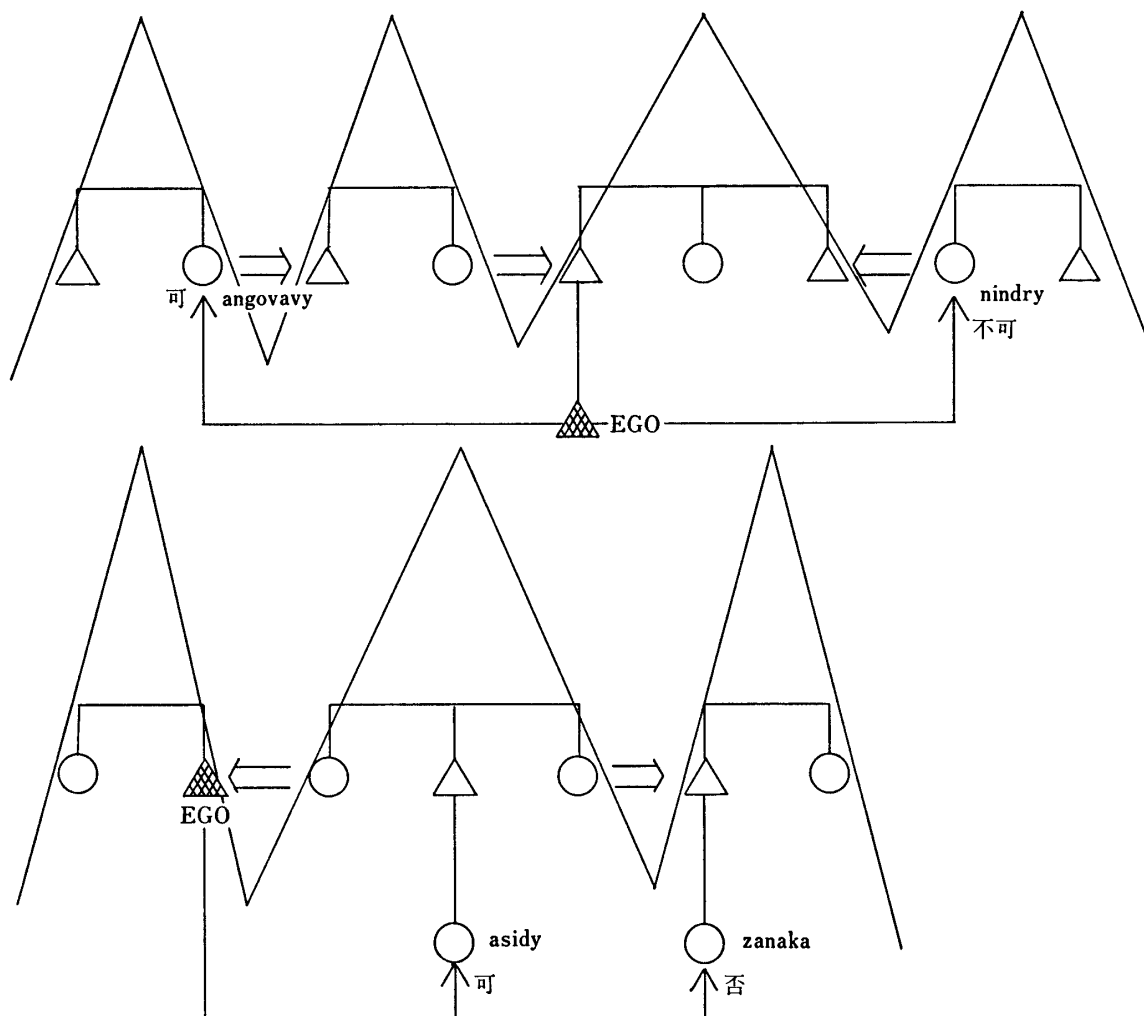
IV 双岐性と婚姻行動

1 サカラヴァ族体系

ツィミヘティ族とほぼ同一とされるサカラヴァ族の関係名称の+1世代と-1世代に見られる先述の双岐性に注目した J. F. バレは, その双岐性の中に, 同性の傍系親族/異性の傍系親族,

婚姻可能な配偶者／婚姻が禁止された配偶者 という二つの対立と「男性は妻の傍系親族と結婚できる」という規則を見出し、その両者の組み合わせに基く婚姻形態を次のように呈示した。

- 結婚可能
 - 自己の集団と隣接しない集団に属する + 1 世代の姻族
 - 自己の集団と隣接する集団に属する - 1 世代の姻族
 - 自己の集団と隣接する集団に属する 0 世代の姻族
- 結婚不可
 - 自己の集団と隣接する集団に属する + 1 世代の姻族
 - 自己の集団と隣接する集団に属さない - 1 世代の姻族
 - 自己の集団と隣接する集団に属さない 0 世代の姻族



さらにバレはこのサカラヴァ族の体系を、レヴィ＝ストロースによってクローオマハ型名称との関係によって指摘された長周期型の婚姻体系に比定した (J. F. Baré, 1974: pp. 32-38)。

たしかに、a. 姻族の親族への変容 b. 理想とされる婚姻を規定しない、などのレヴィ＝ストロースの指摘するクローオマハ体系の特質は (C. Lévi-Strauss, 1967: pp. XXVI-XXIX), 関係名称そのものがクローオマハ型ではない点を除けば、サカラヴァ族を含む北部マダガスカルの諸民族の関係名称から導き出しうる規範と整合性を有するようと思われる。

しかしバレの1974年の論文は関係名称の規範の分析にのみ焦点が当てられているため現実の婚姻行動が明確ではなく、その後の著作の中でも一度女性を受け取った集団とは次世代に於いて縁組を結ぶことができないため、兄弟姉妹交換婚のみが同一集団との間で婚姻を繰り返す唯一の手段であるとの記述が見られるに留まっている (J. F. Baré, 1977: p. 58)。その上、バレは1974年の論文の図に於いて婚姻の交換単位を父系リネージとして扱っているのに対し、現実には交換単位としての集団の機能を、havana と称せられる100~150人ほどの両系的系譜集合体に割り当てており (J. F. Baré, 1977: pp. 36-37, p. 58)、関係名称のみから導かれる論理と現実の社会行動との間には齟齬が見出される。バレの分析結果を踏まえつつ、この点をツィミヘティ族の関係名称と行動に於いて検証してみよう。

2 ツィミヘティ族体系と行動

関係名称中+1世代に於いて $\{F=FB\} \asymp MB$, $\{M=MZ\} \asymp FZ$, -1世代に於いて $\{C=BC\} \asymp ZC$ または $\{C=ZC\} \asymp BC$ の双岐性ないし系の区分が認められ、サカラヴァ族体系と同一である。一方ツィミヘティ族の婚姻規制は、祖先を同じくする親族 (havana) の男女間の性関係を「インセスト」(mandoza)⁽¹⁴⁾ と規定し、性関係と婚姻の双方を禁止している。しかし、この婚姻規制は何らかの親族集団を交換の単位とするような族外婚の行動を導くわけではなく、手許の資料からは村落内に於いて親族に分類される男女の婚姻例が皆無であることの他には、地理的にもまた関係名称上のカテゴリーに於いても特定の傾向やパターンを看取することはできない。親族の枠外で個人的に配偶者の選択が行なわれているという言い方が、ツィミヘティ族の婚姻行動の現実にも最も即している。さらに関係名称だけを独立に採りあげても、全体として基本体系ないし規定的体系を構成してはいない。その意味では、関係名称の体系・婚姻規範・現実の婚姻行動の三者の間に矛盾はないものの、では上記の+1世代と-1世代に於ける双岐性や系の区分は、何を「表わす」ものなのであろうか。

+1世代に於いては $F=FB=MZH$, $M=MZ=FBW$, $MB=FZH$, $FZ \asymp MBW$ であり、前二者が表と裏の対称的關係にあるのに対し、後の二者は非対称である。また MZH , FBW , FZH , MBW は、親族との婚姻を禁止しているツィミヘティ族の規範に照らし、自己にとっては非一親族に相当する。ツィミヘティ族の視点からすれば、iada [$F=FB$], niny [$M=MZ$], angovavy [FZ], zama [MB] は親族の内に含まれるが、関係名称という視点からすればこれらの用語は必ずしも「親族の名称」というわけではない。

0世代に於いては $B=WZH$, $Z=WBW$, $WB=ZH$, $WZ=BW$ の対称性が認められる。兄弟姉妹交換婚を設定すればこの等号を良く説明しうるものの、a. 関係名称全体は対称的な体系を構成していない b. ツィミヘティ族自身は姉妹交換婚を望ましいとする理念を持たない上、父方親族も母方親族も等しく親族 (havana) として婚姻禁止の対象となる規範の下では姉妹交換婚を世代

的に繰り返すことは不可能である c. 過去にまで遡って婚姻例を調べた範囲内では、一人の男性が二人の姉妹と結婚した例、逆に一人の女性が二人の兄弟と結婚した例は数例確認されたが、兄弟姉妹交換婚の事例は皆無である ことなどからもこの仮定を支持することはできない。この現象に関してはその他にも民俗的還元論や延長論の視点からの説明が加えられているが (B. Koehlin, 1975: p. 33, R. Dubois, 1979: p. 57), ツィミヘティ族は特にこのような論理や視点を持ってはいない。

— 1 世代に於いては、自己が男性の場合 $\{C=BC\} \neq ZC$ で系が区分されると共に、 $C=BC=WZC$, $ZC=WBC$ も成立する。この対称性は兄弟姉妹交換婚を設定することによってひとつの説明の可能性が与えられるが、上記の如く zanaka と asidy とは共に親族に分類され婚姻不可能の間柄であることなどからも妥当性をもたない。一方また、なぜ明らかな姻族のカテゴリーに属する妻の兄弟や姉妹の子供が親族と同じ zanaka, asidy の名称によって区分されるのであろうか。

ツィミヘティ族の関係名称を、親族のカテゴリー化や姻族のカテゴリー化の側面からのみ捉えてゆくと、必ず何処かに説明の不可能性を抱え込んでしまい、関係名称としての全体性や体系性を放棄せざるをえなくなってしまう。仮に関係名称としての全体性や体系性を否定しないとするならば、どのような説明の可能性が残されているのであろうか。

V 社会カテゴリーとしての名称体系

ここでツィミヘティ族関係名称を説明する視点として挙げるのは、「子供の男性 EGO はまず自分を父の世帯に位置づける一方、成人の男性 EGO はまず自分をひとつの共同体と考える自己の亜氏族村落の成員と位置づける」ということが私の命題である。男性 EGO が〈私達のような人びと〉と見なす集団の構成および成員権の時間的推移、これこそが我々がトロブリアンドの親族カテゴリーの特性を理解するための根本である」と私は主張する (E. R. Leach, 1958: p. 126) と述べる E. R. リーチの〈親族カテゴリーの非系譜論／親族カテゴリーの社会カテゴリー論〉の視点である。その場合のポイントは、トロブリアンド島民と同じく系譜関係から居住の要件への移行である。

親族同士の婚姻と性関係の禁止といった事項の他には積極的な婚姻規範を持たないツィミヘティ族であるが、婚姻後の居住については夫方居住という確固たる規範を有している。すなわち、a. 村内に住居する51組の完全夫婦の中で妻方居住を行なうものは3組である b. 婚入女性に対しては vaiavy nalaiñy すなわち「連れて来られた女性」という名称が与えられる一方、妻方居住婚を行なう男性に対しては jaoloko なる単独名称が与えられている c. jaoloko の男性に対しては「女に従う男」「女に負けた男」「実家に水田も牛もない貧乏人」「牛車をいじることしか能のないつまらない奴」「低いラフィヤ椰子の葉を集める奴 (女性の仕事をする者の意)」など様々な

否定的言辭が与えられる ことなどからも、これを検証することができる。

このことを基礎に社会カテゴリーの基準を考えると、1) 自己の村と他の村との区分、2) 婚姻を契機とする居住村落の移動、3) 婚姻による女性の交換 の三点が挙げられ、2) と 3) はひとつにして婚出／婚入の二語によって置き換えられる。婚姻後の居住は夫方居住が前提であるため男性は不動であり、したがって社会カテゴリーの第1は、自己の村の男性を表わすカテゴリーと他の村の男性を表わすカテゴリー がなければならない。第2に、自己の村の女性を表わすカテゴリーと他の村の女性を表わすカテゴリー がなければならない。次に第1の系として、自己の村に婚入する女性のカテゴリーと他の村に婚入する女性のカテゴリーの存在が予期される。系の系としては、自己の村を婚出する女性のカテゴリーと他の村を婚出する女性のカテゴリー の存在も考えられる。第2の系として、自己の村の女性の受け取り手のカテゴリーと他の村の女性の受け取り手のカテゴリー の存在が予期される。

以上の社会カテゴリーを EGO を男性として実際の関係名称と重ね合わせたのが、次の表である。

項目 世代	関係名称	自 己 の 村	他 の 村
+ 1	村の区分	父 の 村	母 の 村
	関係名称		
	iada	父の村の男性	母の村の女性の受け取り手
	niny	父の村に婚入する女性	母の村の女性
	zama	父の村の女性の受け取り手	母の村を婚出する女性
	angovavy	父の村の女性	母の村の男性
zana	父の村を婚出する女性	母の村に婚入する女性	
0	村の区分	自 己 の 村	妻 の 村
	関係名称		
	rahalahy	自己の村の男性	妻の村の女性の受け取り手
	anabavy	自己の村の女性	妻の村に婚入する女性
	valilahy	自己の村を婚出する女性	妻の村の男性
	rañao	自己の村の女性の受け取り手	妻の村の女性
- 1	zanaka	自己の村の子供	他の村の子供
	asidy		

系の区分や双岐性の無い+2世代の dady と-2世代の zafy, 姻族名称として限定的にしか用いられない soja, rafozana, vady, namana および vinanto は表から省略してあるが、上記のカテゴリーの区分そのものを変更させるものではない。

この結果、+1世代と0世代に於いては居住村落の区分と婚出／婚入を軸に、-1世代に於い

ては居住村落の区分を軸に、社会カテゴリーと区分が形成される。たとえば、系譜上は $F=FB=MZH$ etc. と表示される *iada* という名称は、自己の（父の）村の男性のカテゴリーと他の（母の）村の女性の受け取り手のカテゴリー、2つの社会カテゴリーの表示として捉えることができる。自己の村の男性のカテゴリーと他の村の女性の受け取り手のカテゴリーとは相補的な言辞であるが、両者を系譜的な等号で結ぶ必要性と必然性は全くない。もしそれを行なえば、再び親族か姻族かの循環論法に陥ってしまうことになる。むしろここで重要なことは、*iada* という名称について、自己の村に於いて規定される社会的カテゴリーと他の村に於いて規定される社会的カテゴリーとが、相補的であるにしても二律背反ではないことである。仮に *iada* が父の村（自己の村）の男性と母の村（他の村）の男性、2つの社会カテゴリーを表示するとするならば、自己の村／他の村、父の村／母の村という社会カテゴリー区分の基準の設定そのものが無化されてしまうであろう。この点に於いて+1世代では *zama* という母の村の男性を表わす社会カテゴリーが用意されている。一方 *niny* は母の村の女性と父の村に婚入する女性、2つの社会カテゴリーを表わし、ちょうど *iada* と表裏の関係を成している。次に、0世代に於いても+1世代と同様な社会カテゴリーの成立が、認められる。系譜上は $B=FBS=FZS=MBS=MZS=WZH$ etc. と書きあらわされる *rahalahy* とは、自己の村の男性のカテゴリーと妻の村の女性の受け取り手のカテゴリー、2つの社会カテゴリーの表示として捉えられる。*rahalahy* の逆は、妻の村の男性と自己の村の女性の受け取り手の社会カテゴリーを表わす *valilahy*、*rahalahy* の裏は *rañao*、*valilahy* の裏は *anabavy* である。-1世代に於いては、+1世代や0世代と異なり女性の婚入／婚出を社会カテゴリーに組み込む必要がなくなり、自己の村と他の村の区分だけが基準として残される。 $\{C=BC=WZC\} \times \{ZC=WBC\}$ の系譜上の合同と合体は、前者が *rahalahy* の子供すなわち自己の村の子供もしくは自己の村のような子供という社会カテゴリーを、後者が *anabavy* の子供すなわち他の村の子供の社会カテゴリーを表わすものとして説明される。

以上のようにツィミヘティ族の関係名称の全体は、社会カテゴリーの視点を導入することによって、親族名称と姻族名称の対立とそれを克服するための実在しない交換婚の設定という矛盾に陥らずに説明できるものと筆者は考えている。しかし、ここにも問題が無いわけではない。

その第一は、社会カテゴリーの設定の基準が、当該社会には見出されない恣意的なものではないかとの問いである。これに対しては、既に夫方居住婚の規範の存在を指摘した他に、次の事を付け加えることができる。自己の村と他の村との区分は、+1世代に於いては父の村と母の村の区分によって—*fokondray*「父方の親族」と *fokondreny*「母方の親族」—、0世代に於いては自己の村と妻の村の区分—*havana*「親族」と *vaviha*「妻の親族」—によって、それぞれ代表される。夫方居住婚が規範とは言え、離婚や私生児の出生の結果、母方の村に居住する人も少なくはないが、その場合でも、自己の村が母の村に、他の村が父の村にとそっくり入れ替わる結果、社会カテゴリーとその指示範囲と名称には変更をきたさない。同じ事は、0世代に於いて、

妻方居住婚を行なう男性についても言うことができる。さらに、日常生活に於いても、他村落からやって来た親族関係も姻族関係もない人間は「他所者」(vahiny)であると同時に、自己よりも年長の男性は zama, 自己と同年齢ぐらいの男性は valilahy 女性は rañao と呼ばれる事例を確認していることから、「自己の村の人びと」と「他の村の人びと」の区分は、ツィミヘティ族の人びとによって意識された民俗的な区分でもある。

その第二は、+1世代に於いて niny とは異なり、父の村の女性と父の村を婚出する女性の社会カテゴリーは angovavy, 母の村に婚入する女性の社会カテゴリーは zena とそれぞれ別個に表わされるのはなぜかという問いである。各々のカテゴリーが個別に表示されたとしても、社会カテゴリーの区分の体系それ自体には影響を与えないという点を確認した上でその問いに答えるならば、これは社会カテゴリー内部ではなく、zama の MB=FZH, angovavy の FZ, zena の MBW という系譜関係にツィミヘティ族が文化的な特性を与えているという点に説明の視点を求めざるをえないと思う。zama, zena, angovavy を巡る与えられた文化的特性が何であるかを論じる資料に不足しているが、a. 割礼に於いて切除された包皮はその子供の MB である zama がまず第一に食べるべき人間とされている b. 祝い事、祈願、葬式などの際に屠る牛をオイやメイはその zama に要求する事が可能であり、母方オジはその要求を拒むことはできない c. 自己から視て zama, zena, angovavy に分類されるいずれの人に対しても冗談、ことに性的な事柄の冗談、を言うことができる (azo godana) とされている の三点は明らかである。これらの事柄は恐らく男性と女性の象徴的属性の区分、特にその「力」の問題と深く係わっているものと予想するが、ここではその問題の存在の指摘だけに留めておきたい (cf. W. R. Huntington, 1973, M. Bloch, 1982)。

註

- (1) 筆者自身は後述するように、ツィミヘティ族の「親族名称」 kinship terminology は必ずしも親族の類別やカテゴリー化ではないとの点に鑑みて、R. ニーダムなどに従い関係名称 relationship terminology との用語を選択する。しかしながら、親族という民俗語彙に与えられた社会的価値や評価が、社会生活のどのような面でのどのような関係の人びとに対して発せられるのかという用法の研究が大切であると主張するブロックの立場からは、逆に「親族名称」との用語こそが適切であろう。
- (2) 参照した資料は、ツィミヘティ族は L. Molet, 1956 および P. J. Wilson, 1967, ベツィミサラカ族は I. Rakoto, 1971, アンテムル族については I. Rakoto, 1971, タナラ族については R. Linton, 1933 および I. Rakoto, 1971, メリナ族については S. Raharijaona et P. Verin, 1964, バラ族については R. W. Huntington, 1973, サカラバ族については J.-F. Baré, 1974, マシクル族については H. Lavondés, 1967 および P. Ottino, 1963, ベズ族については B. Koechlin, 1975 および I. Rakoto, 1971 である。
- (3) しかしながら、筆者はブロックの主張する「親族名称」の操作的用法という研究視点の重要性が、メリナ族のそれよりは複雑なツィミヘティ族の関係名称について減少するとは考えていない。ツィミヘティ族の関係名称や呼称も、話者と対話者をして「聴衆」の三者が生み出す小さな社会劇の中で、複雑にその運用が変わることを筆者自身も体感しており、ツィミヘティ族に於ける関係名称の操作的用法の分析は、むしろ本論では扱うことのできない将来的な課題である。
- (4) 筆者のツィミヘティ族についての実地調査は、マハザンガ州 (Mahajanga) 北部の一村落に於いて、1983年12月から1985年2月、1986年10月、1989年8月の計3回、のべ16ヶ月にわたって行なわれている。

- (5) ツィミヘティ族の関係名称の採録は既に L. Molet, 1956 および P. J. Wilson, 1967 によって行なわれている。筆者の収集した資料とそれらの記録とを比較すると, a. F と MH に対する名称兼呼称である baba がモレとウィルソンの二人の論文には見られない b. MBW を指示する zena がやはり二人には見られず angovavy の語が FZ = MBW とされている c. HBW, HZH, WBW, WZH を指す roky の語が, 二人によって記録されていない d. DH に対する名称兼呼称である rangahy が二人の中には見られず, vinanto の語だけが挙げられている の四点の違いが認められる。この違いが調査者の側に起因するものなのかそれともツィミヘティ族内部での地域性に起因するものなのかは, これを決定する資料がない。
- (6) 男性一般は lalahy, 女性一般は vaiavy, 雄牛は aômbilahy, 牝牛は aômbivavy と指示されるが, lahy と vavy は独立の名詞なのかそれとも「男性の, 雄の」「女性の, 雌の」を示す形容詞なのか確定していない (cf. R. J. Richardson, 1967, R. P. Abinal et S. J. Malzac, 1955)。ただし, 人間を lahy もしくは vavy によって単独に指示することはない。
- (7) 『マダガスカル語—英語辞典』の著者 R. J. リチャードソンはこの anaka と zanaka との違いについて, 「zanaka がイメリナ地方でよく用いられるとすれば, anaka はもっぱら地方で使用されている」と述べている (R. J. Richardson, 1967: p. 37)。私が参照したマダガスカルの各民族の資料の中で, anaka もしくは anake を関係名称として用いるのは, 南西部のマシクル族とヴェズ族に限られている。
- (8) 村の開祖 (lohan'omby) の共系子孫 cognatic descendants にあたる男女を集的に「土地の主」(tompon'tany) もしくは「土地の子孫」(zafin'tany) と呼び, これらの人びとはその土地の霊的一祭祀的所有者と考えられその土地の祖先の墓への被埋葬権を保有している。これらの「土地の主」の人びとの中でも, 開祖の男系子孫 (tariky lahy) の年長男性には, 神と祖先に対する供犠 (jôro) や祈願 (tsikafara) を司る権利が与えられている。
- (9) ツィミヘティ族に於ける祖先 (razana) とは, a. 死後に牛の屠殺を含む葬式 (fandevenana) を行なうこと b. 遺体はその人の祖先の墓 (ampasan-drazana) に埋葬されること c. 死後 1~5 年の間にさらに牛 1 頭をその死者に対して屠る rasa hariaña を行なうこと の三つの過程を経ることにより, 集合的に子孫を祝福する (mitahy) 存在である。逆に, これらの過程のいずれか一つが欠落した場合には, 死者は「幽霊」(lolo) として子孫に「立ち」(atsangana), 病気や災いをもたらすものとされている。
- (10) ツィミヘティ方言には, 系譜空間を 6 つの関係のカテゴリーへと還元する名称が存在する。a. ampianaka: 自己と +1 世代の父方男性親族および +1 世代の母方女性親族との関係 b. misidy, ampididy: 自己と +1 世代の父方女性親族および +1 世代の母方男性親族との関係 c. ampiafy: 自己と +2 世代および -2 世代の親族との関係 d. ampiralahy: 自己と同世代の男性親族との関係 e. ampiravavy: 自己(女性)と同世代の女性親族との関係 f. ampianadahy: 自己と同世代の異性の親族との関係。これらの名称は話者だけではなく他の第三者を起点としても構わず, 「A は B の ampianaka だ」, 「C と D は ampianadahy だ」という形で日常的にも使用されている。
- (11) ツィミヘティ族の「個人名」には, 洗礼名を別にすると 3 つの名称が与えられている。a. 戸籍簿名 (anarana amin'ny cahier, anarana amin'ny copie 「(戸籍) ノートの名前」): 原則として父親, 私生児 (zaza tany) の場合などは母親, によって子供に与えられ, 自分と親兄弟姉妹以外にはほとんど知られず, 日常呼称としては使用されない 親から子に代々継承されるような「姓」はなく, 上位世代の親族や自己の名前の一部を子供に命名する 事例 自己 BIAINA Robert → 2 男 DARO Robert · 4 男 VANTENA Biaina も見られるが, 誰もがこれを行なっている訳ではない b. 呼び名 (fanajana 「尊称」): 多くは親によって与えられ, 人に知られ, 日常的に使用される。戸籍上の名の短縮 Fanjafokontsoa BIAINA → Fanja, 戸籍上の名の一部を組み込む Befitia → Letiana, 戸籍上の名とは無関係 Elnestine → Piso (猫の意) など幾つかの命名上の類型が存在する 特に本人が病弱だったり先に生まれたキョーダイが死亡している場合には「呪医」(moasy) の指示によりこの呼び名を改めたりあるいは猫, 犬, エビ, 山羊などの「死にくい」とさえる動物の名を与えることが多い c. テクノミー (これもツィミヘティ方言では 'fanajana' 「尊称」と呼ばれる): 命名者は必ずしも親とは限らず, 村の中の人びとの日常生活の中で使用され, 流布し, 定着する 乳幼児死亡率が高く, ツィミヘティ族の慣習も歯が生える以前の赤ん坊 (zaza mena) は「人間」(oloña) と見なさず, 死亡に際し一切の葬式および祖先の墓への埋葬を行なわないため, 第一子が生まれかつ命名がなされてもすぐにその両親がテクノミーを以って呼ばれるわけではなく, テクノミー名が使用され定着するまでにはおよそ半年から一年近くの時間が必要である ツィミヘティ族のテクノミーによる呼称には, 「~の父」, 「~の母」という最もありふれたタイプに加わえ, 「~の母方オジ (zaman'i~)」という独特の用法が存在する。これは兄弟姉妹がいる場合, 姉が子供を生むとその下の弟が結婚や子供の有無の別を問わず, 姉の長子の名を冠し「~の母

方オジ」と呼ばれる慣習である。したがってこのような男性は、自分が子供をもった場合には、「～の母方オジ」に加わえ「～の父」という二つのテクノミーによる呼称を受けることになる。テクノミーは必ずしも実子の出生だけが契機となるのではなく、子供をもたない男性／女性が連れ子をもつ女性／男性と結婚した場合にも、その連れ子の名を冠して「～の父」/「～の母」と呼ばれるようになる。たとえ親といえども、テクノミーによって呼ばれるようになった息子や娘に対してはテクノミーを用いる可きであり、それまでの呼び名は使う可きではないとされている。また、テクノミーの基になっている子供が死亡した場合には、その子供の名を以って呼称することは以後、「禁忌」(fady) である。

(12) およそ下記のような年齢階梯区分である。

区 分	年 齢	男 性 lalahy	女 性 vaiavy
antitra (老 年)	45	(長 Sojabe 老 Zokin'olona)	antilahy (老年男性)
			antivavy (老年女性)
matanjaka (壮 年)	18	fikambanana tanora sy matanjaka (青・壮年組)	manam-bady, mitondra vady (既婚)
			jaoloko (妻方居住男性)
			vaiavy nalaiñy (婚入女性)
tanora (若 年)	6	fikambanana tanora (子供組)	lehigaño (未婚男性)
gaoño (子 供)			mitovo (未婚男性・女性)
X	1	tsitsoko (未割礼男子)	zaza hely, gaoño madinika (子 供)
	0		zaza mena (赤 ん 坊)
			zaza rano (水 子)

年齢基準は fikambanana matanjaka と fikambanana tanora とを分ける18才を除けばおよその目安であり、男性の場合でも上位区分に上がるに際しての通過儀礼や加入儀礼は、割礼 (famosiran-jaza) だけである。

(13) メリナ族に於ける親族名称の汎用に注目した M. ブロックは、親族名称に於ける操作的意味 tactical meaning と価値的意味 moral meaning との区別をして考察するべきことを提唱した (M. Bloch, 1971b: pp. 79-80)。その区分を踏襲すればメリナ族社会とツィミヘティ族の関係名称は、分類上のパターンとは別に、操作的意味に於いては等しいが、価値的意味に於いて異なると言うことができよう。すなわち、ツィミヘティ族社会では、「親族」(havana) に一級の価値が付与され、安定的かつ信頼しうる社会関係の表現として用いられるところまではメリナ族社会と同一であるが、ひとつのムラ (fokon'olona) の成員も全て「親族」であるべしとのイデオロギーは付加されていない。このことは、a. メリナ族のムラの王国制の枠組の中での政治的・経済的な独自の史的展開 b. メリナ族に於ける親族内婚の推進とツィミヘティ族に於けるその忌避に起因するものと考えられる。

(14) mandoza の語根は loza であり、loza は一般に「災い」「危険」「異常」を意味する (R. J. Richardson, 1967: p. 402, R. P. Abinal et S. J. Malzac, 1955: p. 414)。ツィミヘティ族に於いては、このような親族関係にある男女が性関係をもつと、その男女、とりわけ女性が病気になるものと考えられており、このことに起因する病気を治癒するには、供犠石 (lokambato もしくは toñy) に於いて「土地の主」の長老男性の手により神と祖先に対する牛の供

儀を執行し「贖罪」(manasa tsify) しなければならない。1985年当時、村内に居住しかつ親族関係にある男女間の性関係の事例が6～7例認められたものの、それに対応した行動などは何らとられてはいなかった。

- ⑩ 結婚 (fanambadiana) は現在、男性側から女性側への moletry と呼ばれる牛と金の贈与を指標に考えられており、その有無が婚姻関係とその他の男女の性関係や同棲関係を弁別している。
- ⑪ ツイミヘティ族に於いては、ソロレート婚、レヴィレート婚に関する理念や規定も特に存在しない。ただ、夫方の村落に居住する婚入女性については、夫が死亡しその子供を生んでいる場合には、a. そのまま寡婦を続けるか、あるいは b. 夫の親族の男性と再婚すること のいずれかを条件に夫方の村落への居住が引き続き認められる という規定が存在する。ただし、自己の父や母の村、あるいは再婚して新しい夫の村 などに移り住むことも寡婦の自由意志として認められている。

引用文献

- Abinal, R. P. et S. J. Malzac 1955 *Dictionnaire Malgache-Français*, Paris; Éditions Maritimes & Coloniales
- Baré, Jean-François 1974 "la terminologie de parenté Sakalava du Nord (Madagascar)", *L'Homme* tome. 14 no. 1
- 1977 *Pouvoir des Vivants, Langage des Morts, Idéologiques Sakalava*, Paris; François Maspero
- Beaujard, Philippe 1983 *Princes et Paysans, les Tanala de l'Ikongo, un espace social du sud-est de Madagascar*, Paris; L'Harmattan
- Bloch, Maurice 1971a *Placing the Dead: tomb, ancestral village and kinship organization in Madagascar*, London; Seminar Press
- 1971b "the moral and tactical meaning of kinship terms", *Man* vol. 6
- 1982 "death, women and power", *Death and the Regeneration of Life*, eds. M. Bloch and J. Parry, Cambridge; Cambridge University Press
- 1937-1970 *Boky Firaketana ny Fiteny sy ny Zavatra Malagasy*, Tananarive; Imprimerie Industrielle & Imprimerie Catholique
- Dubois, Robert 1979 *Olombelona, essai sur l'existence personnelle et collective à Madagascar*, Paris; L'Harmattan
- Faridanonana 1977 *Ratimbolana Diksionera Tsimihety*, Antananarivo; Akademia Malagasy
- 深澤 秀夫 1987 「親—子関係を巡る集団性の表出の位相—北部マダガスカル ツイミヘティ族に於けるフィアナカヴィアナ考—」『社会人類学年報』 13号
- 1989 「稲作を生きる、稲と稲作の実践と戦略—北部マダガスカル Tsimihety 族に於ける稲作と協同労働—」『東南アジア研究』 26巻4号
- Huntington, Richard W. 1973 *Religion and Social Organization of the Bara People of Madagascar*, Ph. D. Thesis of Duke University
- Koechlin, Bernard 1975 *Les Vezo du Sud-Ouest de Madagascar*, Paris; Mouton & Co. et École Pratiques des Hautes Études
- Lavondés, Henri 1967 *Bekoropoka; quelque aspects de la vie familiale et sociale d'un village malgache*, Paris; Mouton & Co.
- Leach, E. R. 1958 "concerning Trobriand clans and the kinship category", *The Developmental Cycle in Domestic Groups*, ed. J. Goody, Cambridge; Cambridge University Press
- Lévi-Strauss, Claude 1967 *Les Structures Elementaires de la Parenté*, Paris; Mouton & Co.
- Linton, Ralph 1973 *The Tanala, a hill tribe of Madagascar*, New York; Kraus Reprint Co.
- Molet, Louis 1956 "démographie de l'Ankaizinana", *Mémoires de l'Institut Scientifique de Madagascar*, Series C. tome III
- Murdock, G. P. 1949 *Social Structure*, New York; The Macmillan Company
- Ottino, Paul 1963 *Les Économies Paysannes Malgache du Bas-Mangoky*, Paris; Éditions Berger-Levrault

- Raharijaona, Suzanne et Pierre Verin 1964 "le système de parenté merina ; essai d'analyse", *Annales de l'Université de Madagascar ; série lettres et sciences humaines* no. 2
- Rajemisa-Raolison, Régis 1969 *Grammaire Malgache*, Fianarantsoa ; Librairie Ambozontany
- Rakoto, Ignace 1971 *Parenté et Mariage en Droit Traditionnel Malgache*, Paris ; Presses Universitaires de France
- Richardson, R. J. 1967 *A New Malagasy-English Dictionary*, England ; Gregg Press Ltd.
- Thomas-Fattier, Dominique 1982 *Le Dialecte Sakalava du Nord-Ouest de Madagascar, phonologie-grammaire-lexique*, Paris ; SELAF
- Wilson, Peter J. 1967 "Tsimihety kinship and descent", *Africa* Vol. 37 No. 2